

291.63  
82-~~168~~

# 道後温泉誌略

## 道後湯之町

名義

古史ヲ按

ルニ伊豫國ハ古昔ヨリ二部ニ分レテ字摩新

屏周布桑村越智野

間風早ノ七郡ヲ道前ト云ヒ和氣温泉久米伊

豫深穴喜多守和

七郡ヲ道後ト稱ヘシナリ然レトモ世人道前

ヲ唱ケルモノ甚々稀ニシテ道後モ亦單ニ温泉ノ邊ノ名トハナ

リタリ

位置 此地ハ松山市ヲ相距ル僅ニ十餘町ニシテ道後山ノ麓ニ

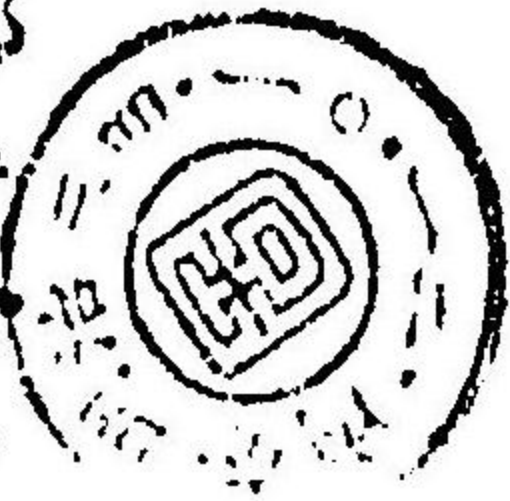
沿ヒ出雲岡ノ北鷺谷ノ南ニ位セリ

地勢 土地高燥山巒ヲ東北ニ負ヒ田圃ニ西南ニ面ス綠樹蒼鬱

トシテ一水東ヨリ西ニ流レ其一半ヲ貫下ス

市街 市街ハ最モ繁盛ニシテ戸數人口等ハ左ノ如シ

一戸數 四百十六



一人 口 千六百七十 男七百四十七 女九百二十三

客舍 大小殆ト一百戸概ネ清淨ニシテ便利殊ニ宜シク浴客ヲ  
懇待スルヲ以テ風ヲ成セリ

食品 海陸ノ食品ハ豊且美ニシテ人ノ嗜好ニ隨ヒ應給セサル  
モノナレ

氣候 氣候ハ温和ニシテ華氏四十度ヨリ九十度ノ間ヲ昇降ス  
空氣ノ流通甚タ宜レク概シテ避暑防寒ニ適ス

古來此地ヲ熱田津又就田津或ハ他田津トモ稱セリ故ニ豫陽俚  
諺集ニハ和歌名所記ニ津之部ニ入レリト載タリ今諸書ニ就キ

熟々考究スルニ此地往古ハ海灣温泉ノ邊リマテ船舶ヲ通セ  
モノガ其微効左ノ如シ

日本書記 齊明天皇七年春正月丁酉朔壬寅御船西征始就于海路甲辰

御船到于大伯海時大田姬皇女產女焉依名此女大伯皇女庚  
戌御船泊伊豫熱田津石湯行宮云々

類衆歌林

從岡本宮馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅御船西征始  
就于海路庚戌御船泊伊豫熱田津石湯行宮天皇御覽昔日猶  
存之物當時忽起感愛之情所以因製歌詠爲之哀傷也

御製

熱田津爾船乘世武登月待者

潮毛可奈比沼今者許藝乞業

萬葉集

山部 赤人

皇神祖之神乃御言乃敷坐國之盡湯者霜左波爾雖有島山之  
宜國跡極此疑伊與能高根乃伊佐爾波乃岡爾立而歌思辭思  
爲帥三湯之上乃樹村平見禮者臣能木毛生繼爾家里鳴鳥乃

音毛不更遠代爾神左備將往行幸處

反歌

百式紀之大宮人之飽田津爾

船乘將爲年之不知久

伊豫古蹟志

古有大江而通街衢口中爲市殷富尤甚矣仁德帝十二年癸未  
 穿江控海湖名堀江過御幸阿沼美之間至于持田邑南沂石手  
 河往來舟船達于温湯之街衢或去或來此泊彼宿無不如其意矣  
 雖然迂遠而進也洪水爲方割土民咨之遂使流瀉于西於是坊  
 歸其宅漸水勢順下也然自是厥後此江莫泉源可受竭枯而舟  
 行不通塘堤弛崩焉民議謀利墜堰卑壘而爲田是厥古稱津云  
 磯湯者皆由此江通舟故也耳

等ノ如クニシアレハ既往ノ地形推想スベク又舊蹟考ニ昔時ハ  
 温泉ノ地名ヲ熟田津又就田津ト云ヒ或ハ飽田津トモ云ヒテ温

泉ノ邊リマテ船ツキニテアリレカ今ハ地脈大ニ變シテ潮水ノ  
 退クコト一里半熟田孰田飽田ヲ合セ其海濱ヲ名クテ三津ト云  
 ヘリ又愛媛面影ニ三津濱人ノ云ヘラク昔ハ彼ノ山際マテ海ニ  
 テ此邊リハ総テ築地ナリ三津ノ三ハモト假名ニテ古 天皇等  
 ノ行幸アラセラレシ時御船ノ泊セン所ナレハ御津ト云ヒレテ  
 後世三津トハ云ヒシナル可シトアリ

西下シテ良港ニアリ一ヲ三津濱港ト云ヒ一ヲ高濱港(棧橋ノ設アリ)ト  
 云フ大坂神戸及高松多度津吳宇品別府大分八幡濱宇和島馬關  
 博多長崎其他ノ諸港ニ往復スル漁船必ス此港ニ投錨シ且大小  
 ノ商船常ニ幅淡スルヲ以テ運輸甚便ナリ  
 里程 道後湯之町ヨリ各地ヘノ里程左ノ如シ

松山市	十五町	此間漁車アリ
三津濱港	一里五合	同
高濱港	二里	同



### 道後温泉由來

伊豫國道後温泉ノ由來ハ地神氏ノ世大己貴命少彦名命ト同心戮力シテ國家ヲ經營シ普テ秋津洲ヲ周歴ス然ルニ少彦名ハ仁慈深クシテ若シ蒼生ノ疾病ニ罹ルモノアル時ハ藥草ヲ探テ之ヲ服サレテ或ハ鳥獸昆虫ノ災毒ニ觸ルモノコハ之ヲ癒スニ呪文ノ法ヲ授ク又大己貴ハ專ヲ猛威ヲ以テ民ヲ制ス斯テ二神此地ニ到リシ時大己貴悔耻テ絶息シタレハ少彦名大ニ驚愕シ專ニ温泉ヲ汲テ其体ヲ浴セシム稍アリテ蘇生シ歌ヲ詠シ暫時假寐スル哉ト宣ハリ勢ヒ猛ク側ノ石ヲ踏シテ起テ給ヒス其石今尚温泉ノ側ニ在リ世之ヲ靈ノ石ト稱ス斯ノ如ク上古已ニ靈異ノアルアリテ實ニ本邦温泉ニ浴スル是ヨリ先ナルハナク又効驗ノ著シキ此ノ上ニ出ルモノナレ故ニ八皇ニ降リテ畏ニ七帝四后ノ御幸アルコト左ノ如ク

- 第七代 孝靈天皇 后細媛
- 第十二代 景行天皇 后八坂入媛
- 第十四代 仲哀天皇 氣長足姬 神功皇后
- 第三十四代 舒明天皇 后天豐財重日足姬
- 第三十七代 齊明天皇
- 第三十八代 天智天皇
- 第四十代 天武天皇

第三十三代推古天皇四年十月聖德太子此ニ啓ス葛城臣及高麗ノ僧惠聰法師等從フ命シテ湯之岡ニ碑ヲ建テ其ノ事ヲ勸セシム其後地震ノ激變ニ遇ヒ温泉ノ所在ヲ失スル久シ或時一鷲ノ其脛ヲ傷フアリ朝夕來リテ溪水ニ溜シ日ヲ累テ癒ルヲ得振々群ヲ追フテ去ル觀ルモノ之ヲ奇異トシ其ノ所ヲ掘鑿シ再ヒ温泉ノ泉源ヲ探究シテ浴池終ニ舊ニ復スヲ得タリ今此邊リニ鷲溪又ハ鷲湯等ノ地名アルハ蓋之ニ因セリ後屢々地震ノ災ヲ

蒙リテ泉脈ノ閉塞スルアリ今國史ニ見在シ或ハ傳記ニ存スル  
モノヲ左ニ記ス

推古天皇三十六年地大ニ震ヒテ溫泉爲ニ陷没レ舒明天皇三年  
九月ニ至リ再出ス

白鳳十三年十月十四日地又大ニ震ヒ山嶽崩レ人畜死シ湯泓埋  
没シ泉脈閉塞ス國司河野玉興之ヲ鑿ツテ故ノ如シ

天平勝寶元年平智宿禰玉興僧行基律師ト相謀リ始テ石槽  
ヲ設置ス

享祿四年三月此地賊徒峰起レテ湯之岡ニ相戦フ時ニ鐵刀ヲ此  
池ニ洗フ溫泉立ロニ涸ル茲ニ於テ湯神社ニ祈願セシカハ湧出  
元ノ如クニ至レリト

此年十月國守河野太郎通直湯泓及石槽等ヲ修營ス

慶長十九年十月廿五日地大ニ震ヒ傍山崩壞レ湯泉爲ニ没ス時  
ニ加藤嘉明任國タリ諸民ヲ促レテ之ヲ穿タシム明年正月二日

ニ至リ湧出舊ノ如シ

寛永二年三月十八日地震フ溫泉忽チ止ル其翌日ヨリ漸々舊ニ  
復セリ

貞享二年十二月十日地又震ヒ清泉變レテ黃濁ス暫時ニレテ舊  
ニ復セリ

寛永四年十月四日地大ニ震ヒ溫泉埋没ス翌五年閏正月廿九日  
ヨリ湧出レテ舊ニ復ス

嘉永七年十一月五日地又大ニ震ヒ泉脈閉塞ス明年二月廿二日  
湯氣初メテ升リ四月六日ニ至リ坐浴舊ノ如ク爾後泥々晝夜ヲ  
熄メス

却說寛永十一年十月松平隱岐守定行當松山ニ徙封セララル其十五  
年定行命シテ砌石浴池ヲ修營シ且ツ其上ニ屋ヲ架レ三區域（  
一之湯二之湯）ト爲シテ士庶ノ分ヲ別チ男女ノ混浴ヲ禁ス爾來  
三之湯是ナリ）ト爲シテ士庶ノ分ヲ別チ男女ノ混浴ヲ禁ス爾來  
繼續シテ明治ノ昭代ニ及ヘリ五年七月之ヲ改築シ新ニ樓ヲ架

レテ浴客ノ休憩ニ供ス是ヨリ前浴錢ヲ徴セシ此ニ至ツテ初テ若干錢ヲ收ム然レトモ比年浴客増加シ頗ル狹隘ヲ告ク依テ十一年別ニ浴室(當時新湯ト云)ヲ増設シ三層ノ樓ヲ構ヘ偏ニ浴者ノ便利ヲ計ル爾後浴客層一層ヲ増加ス此ニ原湯ノ南ニ養生湯ナルモノアリ泓底敷クニ砂ヲ以テレ構造稍粗ニシテ雜客混浴ノ池タリ廿四年之ヲ改築ス泓中清淨頗ル人意ニ愜フ左右樓ヲ設クテ休憩ノ所トナシ共ニ錢ヲ徴ス茲ニ於テ市街ノ西端ニ餘流ヲ引キ男女一湯室ヲ新設シテ之ヲ「まづ湯」ト稱シ衆庶雜浴ノ池トナス固ヨリ錢ヲ徴セヌ又其流末ニ一室ヲ設ク「藥湯」ト稱シ黴毒者癩病人等療養ノ池トナス初メ原湯ノ西側ニ沿フテ一泓アリ牛馬ヲ浴ス今之ヲ西郊ニ置ク

廿五年一月第五六室雨泓ニ涉リ石槽新設ス

明治廿五年九月再ヒ工ヲ起シ第一第二第三ニ若手ヌ同廿七年四月竣工ス泓中巨石ヲ以テ之ヲ疊シ清淨ニシテ開瀾浴者頗ル愉

快チ覺フ其憩フヤ巍々タル三層樓アリ構造美盡セリ坐客自ラ情暢神爽ナラシムヘシ上ニ尙ホ一閣ヲ架ス頂上金鷲ヲ置ク名カテ振鷲閣(正面ニ額ヲ掲ク書ハ陸軍大將山縣)ト云フ鼓ヲ備フ時ヲ報ス第一室南方ノ側石ニ刻シテ改築ノ事ヲ遺スアリ曰ク

此湯爲構造太古貌矣徵諸古歌古以木爲桁匾畫以浴寬永中久松侯就封此國疊石爲泓甃宇架其上浴制大備爾來二百五十又余年漸屬壞頽今茲俚人相謀改築焉明治廿六年六月伊佐庭如矢誌

廿七年二月第一室石槽ヲ改設ス

### 浴室名稱

明治廿七年四月當溫泉ノ總稱ヲ養生湯ト定ム每室ノ稱呼ニ左ニ記スルカ如シ



第一區	御湯殿	稱又新殿
第二區	靈乃湯	男浴
第三區	神之湯	乙室女浴
第四區	養生湯	一室男浴
		二室同
		三室女浴
第五區	松乃湯	東室男浴
		西室女浴
		左室男浴
	右室女浴	

以上五區十室

區外

藥湯  
牛馬湯

現今 親王諸王ヲ始メ内外ノ貴紳陸續入浴セシレ大ニ名譽ヲ博セリ今其ノ貴賤男女一ク年中浴者平均ノ概數ヲ掲クル左表ノ如シ

入浴人員

靈乃湯	甲室男	三千三百三十四人
神之湯	乙室女	二千三百七十一人
	一室男	八万一千三百五十四人
	二室男	十七万七千七百三十二人
養生湯	三室女	十四万二千八十五人
	東室男	二十万六千十六人

松乃湯	西室	女	十六万六千六十七人
	右室	男	十一万六千八百二十人
	左室	女	八万九千二百人

藥湯 三万九千九十五人

總計 百一万七十四人

内譯

男	六十一万三百五十一人
女	三十九万九千七百二十三人

此數ハ全ク浴券ノ賣高ヲ以テ積算シタルモノニシテ鹽ヘハ一人ニシテ一日再浴スルアリ三浴スルアレハ人ノ數ニアラスシテ券ノ數ナリトス又本町民ニテ月定メ入浴券ヲ以テスルモノハ此限ニアラス尙小兒六歳以下浴錢ヲ徴セサルニヨリ此外トス

牛馬入浴ノ概數ハ平均一ヶ年

總數	三千五百五十頭
牛	二千十八頭
馬	千五百三十二頭

### 湯 楯

古來湯楯ニ就キ說ヲナスモノ甚多シ然リト雖モ太古ハ貌タリ傳記ノ正ヲ載スルモノナク口碑ノ信ヲ措クヘキナシ道後古記ニ曰ク鴻荒ノ世椋臣ノ二大樹アリ大サ數百尋稱シテ扶桑木ト云フ湯之岡ニ柱ス其ノ埋木ヲ堀リ得テ湯楯ヲ構ユト又道陽舊誌ニ云フアリ天平勝寶元己丑天十一月國司平智宿禰玉興釋行基律師ト力ヲ合セ之カ修營ヲナシ且ツ其南ニ一大浴楯ヲ増設シタリト

### 六花集

伊豫の湯の湯楯のかつは左八ツ

右は九ツ中は十六

十八

影うつす伊豫の湯桁の敷とてや

わきてさやけき十六夜の月

雅藝歌

伊豫の湯の湯桁はいくつ敷しらす

かそへすよます君はしるらん

万葉集

神さふる伊豫の湯桁の其かみを

おもへは遠き行幸なりけり

新葉集

神さふる伊豫の湯桁のそきならで

わか悲らくの敷そしられぬ

源氏物語空蟬之巻

いよくとれよひをかよめて十はたみそなとか

そふるさまいよのゆのゆけたもたどしかる

ましう見ゆ

石槽

天平勝寶元年乎智宿禰玉興僧行基トカラヲ合セ始テ湯釜ヲ造  
 リ文ヲ鐫ス正面ニ大山祇ノ本地佛大通智勝佛ノ尊像ヲ刻ス之  
 ヲ行基ノ作トス後正應元戊子歲四月八日國守河野對馬守通有  
 僧一遍上人ニ囑シ南無阿彌陀佛ノ六字ヲ寶珠形ノ蓋ニ書セシ  
 ム以テ亭祿四辛卯歲十月國司河野太郎伊豫守彈正大弼通直ニ  
 至ル年ヲ閱スル八百周圍ノ鐫書亦讀ム可ラニ更ニ多幸山嶺勤  
 院天徳寺住職徳應享禪師ニ撰文ヲ命シ石工ヲ備後尾之道芥川  
 ヨリ招キ之ヲ修營シ尊像ヲ藥師如來ニ改ム爾來三百六拾又餘  
 年ヲ經テ明治二十六年ニ至リ浴場改築ニ際スヤ文字ノ明ヲ欠  
 クノミナラス内部焚化シテ又用ユ可ラニ茲ニ於テカ石槽ヲ改

設ノ正面ニ大己貴命ノ少彥名命ヲ掌上ニ弄スルノ像ヲ刻シ寶珠形ノ蓋ニ神語ヲ彫シ周圍ニ山部宿禰赤人ノ和歌ヲ鐫セシム河野通直ノ修營ニ係ル古來ノ石槽ハ今之ヲ振鷲園ニ存ス河野通直ノ修營セシ所ノ石槽寸法左ノ如シ

內徑	三	尺
外徑	五	尺
高	七	尺

外ニ寶珠形蓋ノ高一尺

上部ノ前面ニ藥師如來佛像ヲ彫出ス

其鐫左ノ如シ

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

南無阿彌陀佛

第一層ヨリ輪載スルモノハ

夫吾朝伊豫之國古號二名洲亦扶桑國奉勅命大物部主伊與大連以降連綿而治斯國河野太郎通直者出自 大日靈貴與

大山積二神之孫而饒速日尊之後也世々此國之守護德行兼備詩禪英將也蒼生民撫育加慈悲非凡人也城館北有溫泉上古以降湧沸不絕矣熱仁田謂之仁就田三津名曰石湯亦磯湯媛皇女倭迹々日百襲比子狹鳴媛皇孫大小市○○○伊豫親玉從焉後景行帝幸也八坂入姫從焉又仲哀帝幸也息長帶媛從焉○○坐側有一湯玉碑聖德太子之浴也釋惠聰葛城臣等從焉立碑之○○○地也洗浸聖闕躬無不靈驗則玉顏無不喜既 舒明齊明二帝巡也（以下不詳）

成岩豈遙淺波滿 天智天武爲太子諸王從焉鳳興巡幸總七帝廿八○○○宮年于時有白鳳十三冬十月地大震沸湯塞忽竭國司玉興盤池如故○○○如意寶珠似名臣聞鴻荒之世有扶桑大樹柱此鄉其理本堀得造○○○湯莊嚴將謁延施主國司乎智宿禰玉興與釋行基律師力而湯幹改築矣號外藥

局也盛哉天平勝寶元己丑天十一月吉辰

享祿四天辛卯小春如意吉辰修葺多幸山辯勒院天德禪寺

德應亨撰書

備后國尾之道芥川住石大工

柳原左衛門尉道資彫刻

第一室泓中ニ新設スル所ノ石槽寸法左ノ如シ

内 徑 三 尺

外 徑 五 尺

高 九 尺外ニ寶珠形蓋ノ高一尺二寸

泓底面ヲ拔ク 七 尺

湯平ヲ拔ク 四尺八寸

上部ノ前面ニ 大己貴命ノ少彦名命掌上ニ弄スルノ像

其銘左ノ如シ

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

真靈寢哉

第一層ニ山部赤人ノ和歌一章ヲ輪載ス

皇神祖之神廻御言乃敷坐國之靈湯者霜左波爾雖在嶋山之  
宜國跡極此疑伊豫高嶺乃射狹庭乃爾爾立之而歌思辭思爲  
師三湯之上廻樹郵乎見者臣木毛生繼爾家里鳴鳥之音毛不  
更遐代爾神左備將往行幸處

反 歌

百式紀乃大宮人之飽田津爾

船乘將爲年之不知久

明治廿七年二月再造

前伊豫松山城主從三位菅原勝成

題 神 語

正五位 日下部東作

書 赤人歌

大教正 中臣衛居

畫神像

備後國尾之道石工

石井源兵衛吉光

彫刻神形并寶珠之文

伊豫國松山市石工

今岡愛三郎

製作并彫刻詠歌

養生湯東室西室ノ両泓ニ涉リ新設スル處ノ石槽寸法左ノ如シ

内 徑 二尺四寸

外 徑 四 尺

高 九尺五寸外ニ寶珠形蓋ノ高一尺

敷砂面ヲ拔ク 六尺四寸

湯平ヲ拔ク 四尺四寸

上部ノ前面ニ 大己貴命神像

一面 少彦名命神像

其銘左ノ如シ

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

憫民夭折始製湯泉之術

第一層ニ和歌一章ヲ輪載ス

無嘉志與理多延努奈我麗母佐良耳麻太

和幾伊豆留湯廻志留志乎叙淤母布

出雲 尊福

温泉のおこりは大汝少彦名二神の人民の夭折を憐みては  
しめましつるよし古史に傳ふる所なるか伊豫國道後の温  
泉もやがて其ひとつにて天の下に其名高く聞ゆるまに  
遠近より來かよひあむものいと多く其靈驗もまた著きこ  
どはいふも更なりざるを今回養生湯の底深くはりあらた

めて浴む人の便よからしめむとて其業を思ひたこしたるに湯のわき出ることば元湯にもをさくたどらぬはかりになりぬるはこのとをものするまめ人たちの真心をくみ知りて靈幸ふ神の御心の深きはとさへ思ひはかられていとうれしくいと尊くなむまして温泉の術をはしめたまへる神の御方を石にはりささみたるはせき出る湯の盡せぬ御恵を遠近人にくみしらしめむとてのしらひにていとくたむかしきわさに那難ありけるされはこのまめひとたちの思ひたこせる業は築きかたむる石のとこしへに千萬のひとのたすけとなりなむは更にて其功はた此の温泉とともになかれての世に遠長く傳はらむものそ

明治二十四年十二月

從三位

出雲尊福誌

權大教正

神代名臣書

武藏國入間郡川越氷川神社

祠官兼大教正

中臣朝臣

山田衛居

齋戒繪之

備後尾之道石工

石井源兵衛吉光

彫刻神形并寶珠之文

伊豫和氣郡三津濱石工

吉村右三郎義長

彫刻詠歌并記文

明治卅二年中同御湯殿ヲ新設シ又靈乃湯ヲ改築ス

御湯殿石槽ニ鑄スル所左ノ如シ

上部ノ前面ニ 大己貴少彦名二柱尊像

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

山田衛居書

小松宮彰仁親王御筆

健步如故

靈乃湯石槽ニ鑄スル所左ノ如シ

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

靈

明治三十二年己亥六月

從二位 伯耆 樺山資紀書

### 溫泉溫度華氏計

御湯殿	射出口溫度	射出後溫度
靈乃湯	百十五度五	百四度
同	同	同
神之湯	百十六度	百十二度
同	同	同
二室	同	百十度五

同	三室	女浴	同	百十度五
養生湯	東室	男浴	百十五度五	百九度
同	西室	女浴	同	同
	松乃湯	男浴	百八度五	百四度五
	同	女浴	同	百四度
	藥湯		百三度五	百三度
	牛馬湯		百三度	百二度

備考 射出口溫度トハ湧出スル瀧口ノ溫度ニシテ射出後  
溫度トハ一般入浴スル所ノ溫度ナリ

### 溫泉分拆

伊豫國道後溫泉試驗成績書

依頼者

伊豫國道後溫泉事務所

一溫度



右ハ明治二十九年五月實地調査ノ上試驗ヲ結了セシモノ  
ニシテ其成蹟左ノ如シ

靈湯試驗成蹟表

一本泉理學の性質

- (一) 溫度 攝氏四十五度八(氣壓七五七、氣温一九、九)
- (二) 外觀 淡黄色ヲ帶ヒ殆ト透明ナリ
- (三) 臭味 極微ノ異臭ヲ有シ收味ヲ帶フ
- (四) 比重 一、〇〇一一七(攝氏一五、〇)

一本泉化學的性質

「リートル」中「セ」ヲ表示セシ  
モノナリ

- (一) 反應 亞爾加里性
- (二) 蒸發殘渣 七八、九八五
- (三) 酸素消費量 五、八六五
- (四) 成分 (化學的原則ニ據リ結合セシメタルモノ)

硫酸那篤留謨	一八、九九三
格魯兒那篤留謨	一六、三二八
硫酸加爾叟謨	一三、五一二
硅酸那篤留謨	一二、八五六
炭酸加留謨	七、四二四
硫酸麻佃涅叟謨	五、二九七
重碳酸那篤留謨	二、〇六五
磷酸加爾叟謨	一、三四〇
硼酸那篤留謨	一、一六二
游離及半飽和炭酸	五、九八七
亞酸化鐵	少
硝酸	痕跡

合計

醫治効用 (内服) (外用)

第一 貧血症 慢性腸胃加答兒

慢性癩麻質斯及胸膜炎肋膜炎

心臟ノ諸病 皮膚ノ諸病

第二 神經衰弱症 諸種ノ肺病

氣管支加答兒 男女生殖器ノ諸病

貧血ヨリ來ル腦ノ諸病

養生湯第一第二第三室試驗成績表

一本泉理學の性質

(一) 溫度 攝氏四十六度八(氣壓七五九、氣溫一九、八)

(二) 外觀 僅微ノ黄色ヲ帶ヒ殆ト透明ナリ

(三) 臭味 微ニ異臭ヲ有シ收味ヲ帶フ

(四) 比重 一、〇〇一〇六(攝氏一五、〇)

一本泉化學の性質 一「リ」ートル「中」セ「ン」チ「グ」ラム「ヲ」表示セ「ン」

モ「ノ」

反應 亞爾加里性

(一) 蒸發殘渣 七七、八三七

(二) 酸素消費量 五、五五六

(三) 成分 (化學的原則ニ據リ結合セ「ン」メタルモ「ノ」)

硫酸那篤留謨 一九、六六九

格魯兒那篤留謨 一五、五九七

硅酸那篤留謨 一三、六一三

硫酸加爾叟謨 一一、八五五

硫酸麻備涅叟謨 八、七五八

硫酸加留謨 三、七七五

重碳酸那篤留謨 二、九六四

磷酸那篤留謨 一、五九七

游離及半飽和碳酸 五、八八七

亞酸化鐵 微 量

硼酸  
硝酸

微  
痕

量  
跡

合計

醫治効用 (内服)

第一 慢性癩麻質斯及痛風

慢性肋膜炎及腹膜炎

貧血症 腺病 皮膚ノ慢性炎症

第二 慢性腎炎及膀胱加答兒

婦人生殖器ノ慢性諸病

神經衰弱症 歇私的里

重病後ノ快後期 下痢症

養生湯東西室試驗成績表

一本泉理學の性質

(一) 温度 攝氏四十五度四(氣壓七五七、氣温一九、七)

(二) 外觀 微淡褐色ニシテ潤濁セリ

(三) 臭味 微ニ異臭ヲ有シ味ヒ收斂ナリ

(四) 比重 一、〇一四一八(攝氏一五、〇)

一本泉化學の性質 一「リートル」中「センチグラム」ヲ表示セシ

モノナリ

(一) 反應 亞爾加里性

(二) 蒸發殘渣 八二、九六九

(三) 酸素消費量 六、一一九

(四) 成分 (化學の原則ニ據リ結合セシメタルモノ)

硫酸那篤留謨 二〇、三二五

格魯兒那篤留謨 一七、七九五

硫酸加爾叟謨 一五、九八六

硅酸那篤留謨 一三、〇五五

硫酸麻佃涅叟謨 九、二一四

炭酸加留謨	二、二五二
重碳酸那篤留謨	一、六七九
磷酸加爾叟謨	一、二三一
硼酸那篤留謨	一、四二五
游離及半飽和碳酸	六、三七五
亞酸化鐵	微
硝酸	痕跡

合計

醫治効用 (内服) (外用)

- 第一 慢性胃加答兒及慢性腸加答兒  
 下腹充血 肝臟充血貧血  
 萎黃病肺炎及胸膜炎 喘息
- 第二 喉頭咽頭ノ慢性加答兒及慢性氣管支加答兒  
 一般神經病 痔疾 腺病 煤毒症諸病

子宮炎 便秘

まつ湯試驗成績表

一本泉理學的性質

- (一) 温度 攝氏四十二度(氣壓七五六、氣温一九、五)
- (二) 外觀 黃褐色ニシテ大ニ濁濁セリ
- (三) 臭味 異臭甚クシク味ヒ收斂性ナリ
- (四) 比重 一、〇三五九三

一本泉化學的性質

「リットル」中「センチグラム」ヲ表示セシモノナリ

- (一) 反應 亞爾加里性
- (二) 蒸發殘渣 九七、四二三
- (三) 酸素消費量 七、六五三
- (四) 成分 (化學的原則ニ據リ結合セシノタルモノ)  
 硫酸那篤留謨 二一、七三八

格魯兒那篤留謨	一九、〇一五
硫酸加爾叟謨	一五、二二三
磷酸加爾叟謨	一三、三六二
硅酸那篤留謨	一一、四〇六
硫酸麻備涅叟謨	六、七一五
硫酸加爾叟謨	四、〇三六
硼酸那篤留謨	二、四一八
炭酸加爾叟謨	二、二三五
重炭酸那篤留謨	一、二六八
游離及半飽和炭酸	六、五七八
亞酸化鐵	少
硝酸	少
亞硝酸	多
安母尼亞	少

酸化水素 少量

合計

醫治効用 (外用)

- 第一 梅毒 疥毒 疥癬 其他慢性皮膚病 癩病
- 腺病 軟下疳 硬下疳 粘液漏症
- 第二 多血症 五痔症 肥胖病
- 尿道膀胱及腎盂ノ加答兒 子宮腫脹 水腫病
- 黃疸病

本泉ハ決シテ内服スヘカラス  
右試驗成績及報告候也

明治二十九年六月五日 廣島衛生試驗所技師兼長

溫泉碑

釋日本紀及伊豫風土記等ニ載スル所 推古天皇四年十月聖德  
廿九

杉原 孟

太子葛城臣及高麗ノ僧惠聰法師等ヲ將ヒテ道後温泉ニ行啓アリ大ニ湯ノ靈驗ヲ感歎シ伊佐爾波岡ニ碑ヲ建テ其事ヲ勅スト今其所在ヲ失ス蓋シ天武帝白鳳十三甲申歲十月拾四日四國地大ニ震ヒ土佐ノ田圃五十四萬頃陷テ海トナリ伊豫温泉壅塞ス云々當時碑モ亦土中ニ陷沒セシヤ知ルヘカラス爾來好古ノ徒百方搜索スト雖モ今尙其所ヲ得ス其文載セテ釋日本紀ニ在リ左ニ抄録スルカ如シ

温泉碑

法興六年十月歲在丙辰我法王大王與惠聰法師及葛城臣

道遙夷與村正親神井歎世妙驗欲敘意聊作碑文一首

惟夫日月照於上而不私神井出於下無不給萬所以機妙應百姓所以潛扇若乃照給無偏私何異于壽國隨革壘而開合沐神井而瘳疹韻外于落花池而化濁窺望山嶽之巖礪反冀子平之能往椿樹相蔭而穹窿實相五百之張蓋臨朝啼鳥而戲吐下何曉亂音之聒

耳丹花卷葉映照玉菓彌葩以垂非經過其下可優游豈悟洪灌霽庭意與才拙實慚七步後定君子幸無微蚩啖也

明治廿年五月舊松山藩主久松勝成公碑ヲ温泉場ノ西側ニ建立ス同廿五年十一月之ヲ温泉場東ノ丘ニ移ニ其文ニ曰ク

道後温泉碑

國史曰 舒明帝十一年冬十二月幸伊豫温湯宮明年夏四月

帝至自伊豫又據伊豫國風土記所載 景行帝嘗幸温泉 仲哀

帝亦幸温泉 齋明帝幸時 天智帝 天武帝爲太子諸王亦同

從幸并 舒明帝幸凡六云風土記又稱上古之時少彥名命病劇

既以爲死當時此地已有温泉於是大己貴命用以浴灌少彥名有

聞乃蘇亦不自知病已去體起曰吾假寢乎遂健步如故蹈旁石去

其跡蓋存云蓋蓋爲 吾邦浴温泉之始則地神氏世所從來尙矣

非特見賞於人皇也後乃祀少名大己於其旁爲湯神又有伊佐爾

波神祠亦曰湯築後更曰湯月相傳 仲哀帝與 神功后幸温湯

后因有身生 應神帝 應神廟號八幡宮故 應神帝為主因  
並祭 仲哀帝神巧后今名曰湯月八幡宮崇祀最大云謹按國史  
諸書所載 我邦溫泉所創莫先於此又考萬葉諸什國風所采莫  
尚於此湯之前故有圓石圍可三尺名曰玉石亦古歌所詠以為神  
代之表者也則立自太古可徵矣其諸神祠載在

祠典 諸帝行宮今御幸寺是也夫陵谷變遷桑海移易名存實沒  
蓋亦不渺而此湯之出也蓋自剗剗厥曠遠者不知其始姑以所聞  
近者年紀尚且在地神氏之始至今數十萬載而不絕浴者起廢其  
効日新豈非造化凝精神明祐福者邪風土記又載 聖德太子所  
命立碑文雖世所記聞然其辭不可讀義多可疑且其石不存今不  
可得而考據故闕焉爾自寬永中松山侯食封伊豫國溫泉在疆距  
松山治城東北廿里於是累世尊崇其湯及神祠及今矣源定喬刻  
石紀其事志傳永久乃典故所列足以徵文獻矣銘曰  
爰有溫泉在豫之土厥初養民曩自太古人皇錫胤六降 帝武

神后禮祀載震茲澗天開靈滋祉我 東方歷載千萬原泉彌長養  
精獨穢疾沈廼忘億兆一浴壽考無疆願其側神廟奕奕應皇陟  
降於穆不斁二神攸相永護溫液其永維何有密玉石於昭先王誕  
陳國風先民自古其頌于隆松矣受封克敬神功立石勸事厥圖無  
窮

南郭服部元喬選

天保十四年歲在癸卯冬十一月望於道後客舍之東窻

越後長岡 雪城中澤俊鄉謹書

碑陰 = 載スル所左ノ如シ

此所刻服部南郭碑文寶曆中松山藩第六世松平定喬公命所撰當  
時未及刻石而寢不詳其故文中引伊豫風土記今逸不傳惟溫泉  
一項幸載在釋日本紀據此則聖德太子立碑湯岡側者信矣文亦  
載釋紀中惜其碑蚤亡不知所在順天武帝十三年四國地大震土佐  
田岡五十萬頃陷為海伊豫溫泉壅塞意碑亦此時沒土中者歟浴  
池之制古以桁計其數極多六花集有左八右九中十六之歌備馬

樂歌以伊豫湯楯爲不易算源語以屈指計物比數伊豫湯楯其盛可知矣中間無開寬永十五年藩祖定行公大加修繕砌石作三方池池各方二間溫泉廣出乎其中曰一之湯二之湯三之湯一湯限士人二湯婦女三湯庶人其背承三池之流爲一大池底敷砂以板圍分三區蓋古之遺制也一日十錢湯一日十五錢湯其最廣曰養生湯旅人雜客浴之皆不要錢十錢十五錢亦唯名而已其實非微錢蓋襲舊稱也既成公命天德寺僧雲巖作溫泉記書板湯門楣今已朽矣太子之碑失所在雲巖之記不上金石而南郭之文亦不果刻則定喬公之遺志永湮滅而溫泉終無一碑傳舊事也里人伊佐庭如矢等慨于此請舊藩主從四位久松勝成公建碑公家幸有中澤雪城所書南郭文欲刻之以成先志乃擇貞珉命王並命啓書其事勸諸碑陰啓開廢藩請後新開一湯室浴法亦大變故補南郭文之所不及詳記藩制以傳於後云勝成公松山藩第十三世初仍襲稱松平氏維新後復本姓

明治十九年丙戌六月

松山 從六位藤野正啓謹識

古富 卓書

山崎 群鴻 鐫

### 諸帝行在所

第七代 孝靈天皇 后細媛

今其所ヲ知ラズ

第十二代 景行天皇 后八坂入媛

湯泉場ノ北欄亭ニ沿フ小段中古河野氏香花院ノ舊跡ニシテ現今尙龍穩寺山ト稱スル所ナリ

第十四代 仲哀天皇 氣長足姬 神功皇后

伊佐爾波神社へ登ル石礎ノ中間ヲ南ニ折レテ山坡アリ近來マテ鐘樓ヲ置キレ所ナリ



第三十四代

舒明天皇

后天聖財重日足姬

四十六

和氣郡御幸村御幸寺山ノ麓現今御幸寺ノアル所ナリ

第三十七代

齊明天皇

第三十八代

天智天皇

第四十代

天武天皇

三帝ハ奥谷ニシテ現今寶嚴寺ノアル所ナリ

### 靈之石

又玉之石世俗或ハ御足形石ト云フ

温泉場ノ前ニ在リ所謂大古大己貴命湯ニ依リテ蘇生レ側ノ石ヲ履ミテ起チ給フ其足痕歷然トシテ今尙存セリ

日本書紀ニ載ス玉之石トハ其形ノ圓ナルヲ謂フニ非ラス大己貴命ノ足痕ヲ美稱スルナリト

古歌

伊豫の湯の汀に立る靈の石

こそそ神代のしるしなりける

### 鷺池

温泉ノ庭内ニ一小池アリ湯氣ヲ帶フ之ヲ鷺池ト云フ彼ノ鷺脛ノ毀傷シタルヲ自ラ浴治セシハ此所ナリ

鷺

石

一ニ羽休石ト云フ

前記脛ヲ傷フ鷺來リテ爰ニ止マリ溪邊ヲ占メ脛ヲ浸シ石上ニ憩ヒ又浸シ又憩ヒシ石ニシテ其足形歷々石ニ存レ之レヲ稱スル久シ然ルヲ何時カ失亡シテ之カ所在ヲ知ラサリシニ寛政十二年春二月中旬松山城下圓光寺住僧明月屢々來テ聖德太子建ツル所温泉ノ碑ノ漂滅セルヲ所々ニ探求シ偶々鷺溪ノ邊ヲ彷徨シテ此石ヲ發見シ之ヲ二神社ノ傍ニ置ク其後明治五年温泉ノ上方觀音堂(號鳥越山)ノ側ニ遷シ再遷シテ温泉場ノ庭内ニ置キ又

四十七

元ノ二神社ノ前ニ復置シタルカ明治二十五年八月ヲ以テ祝谷  
村民二神社ト共ニ同村客天神ノ傍ニ遷シタリ

### 古碑臺石

振鷲園内ニ在リ明治五年八月原湯ノ前ニ一層樓ヲ建築スルノ  
際往昔聖德太子ノ建設ニ係ル所在不明ノ温泉碑ヲ搜索セシカ  
タメ湯淵ニ接近ノ地ヲ穿ツコト幾十歩于時今ノ神乃湯第三室  
ノ前ヨリ掘出セルモノシテ古色蒼然タル花崗石ナリ

### 湯神社 一名西之宮

温泉ノ南冠山ノ頂上ニ鎮坐大己貴少彦名ノ二柱ヲ奉祀ニ勸請  
年紀詳ナラズ相傳フ 景行天皇ノ御宇或ハ 舒明天皇ノ御宇  
ナリト云ヘリ延喜式内温泉郡四社ノ一ナリ  
抑モ本社ノ祭神ハ我朝醫家ノ祖神ニシテ衆庶崇敬最モ深ク四

來ノ浴客爭ヒ詣テ身命ノ安全疾病ノ快復ヲ祈ル應護殊ニ著名  
ナリ

某書曰人皇第三十四代舒明天皇十一年己亥冬十二月己巳朔  
壬午幸于伊豫温湯宮此時宮前在棕臣二樹木埤鳩趨鷓二鳥大  
來集天皇憫愛之勅多掛稻穗而養之

前右府公實

### 古歌

鳥の居る木々に稻穂をかけまくも  
かしこき御代の恵みなるらむ  
朝日さす千木のかたそき影そひて  
算ふ湯桁や敷まさるらん

### 出雲崗神社 湯神社ノ西ニ鎮坐

出雲崗神社ハ素盞鳴尊稻田姫命ノ二柱ヲ合セ祀ル處ニシテ延  
喜式神名帳ニ所謂温泉郡四社中ノ一ナリ勸請年紀詳ナラス

夕日かけ八色のくもの古を

おもひ山雲の岡の神垣

### 冠山

温泉ノ南ニ在リ嶺ニ温湯守護神大己貴少彦名ヲ祀ル所ノ祠アリ蓋シ二神ノ恩澤ヲ蒙ル洪大ナルヲ以テ蒙山ト名ケシヲ因音相通スルヨリ後世冠山ト稱ヘシナリ一書ニ云フアリ冬季麓ヨリ湯氣ノ昇ルマ恰モ雲ノ出ツルカ如シ依テ出雲岡ト稱セシト又冠山ハ煙山ノ轉語ナリトスト云ヘリ

### 鬼守社

冠山ノ南石礎ノ東中間ニ在リ

神大市姫命ヲ齊祀スル所ニシテモト兒守御前社ト稱ヘ居リシカ明治三年御前ノ二字ヲ削ラル世俗乳守之神ト稱シテ哺乳ニ乏シキ者多ク之ヲ信仰ス養スルニ土祠ヲ以テス堆積羅列其數ヲ知ラス下陣ニ遊行一遍上人ノ父別府七郎通廣ノ靈ヲ祭レリ故ニ藤澤寺主遊行ノ節ハ必ス參拜ス

### 鷹谷山大禪寺

温泉ノ北鷲谷ニ在リ故ニ山號トス元錄九丙子歲黃檗禪宗大休和尚ノ開基ニテ本尊ハ釋迦如來ナリ境内ニ支那舶來ノ觀世音及芭蕉天滿宮等ヲ安置ス什物ニハ千杲和尚ノ壽像並十八羅漢及釋迦如來(何モ唐縫)ノ幅等アリ

### 蓑毛櫻

大禪寺庭内ニ開基和尚大休ノ手植ノ一櫻樹アリ名クルニ蓑毛ヲ以テス蓋シ鷲ノ蓑毛ニ因リテナル可シ

### 陰涼樹

大禪寺ノ西ヲ少シク登レハ大休ノ墓アリ傍ニ一松樹ノ枝葉宛  
カモ孤鶴ノ遊ヲ仰ルカ如キアリ之ヲ陰涼樹ト唱フ大休初メ當  
寺ヲ創立スルヤ一松樹ノ枝葉鶴翼ノ狀ヲナスモノヲ撰テ此ニ  
之ヲ植ユ

### 鷺之井

往古大禪寺ノ下方ニ一井アリ鷺之井ト云フ相傳フ昔時湧泉清  
澄ニシテ混々絶ル時ナク能ク眼病頭痛等ヲ治セシト然レトモ  
多ク年所ヲ經其跡澀滅シテ知ルニ山ナシ今同地ニ一ノ古井ア  
リ恐クハ其遺趾ナラソ

### 圓滿寺

本尊ハ坐像地藏尊其長ク一丈二尺餘木造ニシテ行基ノ作成ハ

定朝ノ作ナリト云フ昔當寺内ニハ巨大ナル梅樹數多アリテ世  
ノ賞ヌル所ナリシカ漸ク老朽シ元文中全ク枯了セリ後世其ノ  
名ノ湮滅センコトヲ惜ミ數株ノ梅ヲ植ユ今尙存ニ寺内ニ古池  
アリ蛙鳴ヲ聞クニ名アリ松山城主松平隱岐守定長山城ノ井手  
ノ蛙ヲ此ニ放ツ四五月ノ候其音ヲ弄ス相呼相應フ清韻愛ス可  
シ

### 豐國山寶嚴寺 往古誓願院

奥谷ニ在リ一遍上人誕生ノ舊跡ナリ 天智天皇四年國司乎智  
守與奉 勅之ヲ建立ス本尊ハ阿彌陀如來ニシテ春日ノ作トス  
中口殆ト衰滅ニ弘長三年一遍ノ父如佛寂スルヤ翌四年ヲ以テ  
河野上野介通繼得能藏人介通秀ト相計リ之ヲ再建シ且子院十  
二ヲ置ク後子院ハ自然衰滅シテ只林光庵ノ一ヲ存セシカ是モ  
亦近年破壊シテ取除キス其庵室ニ安置セシ上人自作ノ像今尙

本寺ニ存ス則チ現今ノ松ヶ枝町ハ衆坊ノ陳迹ナリ

### 伊佐爾波岡 一射狹庭又誘庭

古來伊佐爾波神社ノ後柿之木谷ト唱フル邊リヨリ湯月古城(現道後)マテ一脈ノ丘陵ニシテ総テ之ヲ伊佐波爾岡ト稱ヘシヲ河野氏湯月城ヲ築クニ當リ要害ニ惡カリナントテ山脉ヲ斷チ其間ヲ濠トナシタルカ故往古ノ岡ノ形象トハ全ク異レリ伊豫風土記ニ云フ聖德太子ノ温泉碑ヲ建ツルハ則チ此所ニシテ諸人常ニ其碑ヲ見ソカタメ互ニ誘ヒ來レリ因テ此名アリ云々

古歌

里人はいさどさそひて誘庭の

ふみかゑすらん年のくれどて

### 伊佐爾波神社

伊佐爾波神社ハ祭神 應神天皇ニシテ 仲哀天皇 神功皇后ヲ合祀セリ伊佐爾波岡ニアリ延喜式内温泉郡四社ノ一ナリ相傳フ南都大安寺住侶行教豐前國字佐ヨリ上京ノ途次來テ此地ニ勸請セリ又河野家系ニハ河野元興是ヲ建立シ道後七郡ノ守護神トナシタリト云フ河野家譜ニ載スル所延久五年國司伊豫守源頼義朝臣河野新太夫親經ト同シク八個所ノ八幡宮ヲ再造シ四拾九個處ノ藥師堂ヲ建立スト蓋シ當社モ此八社ノ一ニシテ當時再建ニ係ルモノナラシカ下テ明應ノ頃河野刑部大輔通宣又再建シ累代之ヲ崇敬シテ湯月城ノ守護神トナシ神領五拾石ヲ寄附セラル河野家退轉ノ後暫時主宰ナク社領モ亦没シ宮殿破壊シ神寶記錄等大半紛亂ス故ニ社傳分明ヲ闕クリ慶長五年ニ至リ加藤左馬介嘉明當國ニ封セラル、ヤ松前城ヲ今ノ地ニ移シテ勝山城(後松山城)ト稱シ永ク當社ヲ以テ本城ノ鎮守トナシ是ヨリ前キ嘉明朝鮮ノ役ニ際シ當社ニ祈願スル所アリシカ

果シテ戰地唐島ニ於テ神夢ヲ蒙リ明日一戰大ニ勝利ヲ得武名  
 ヲ異域ニ輝セリ嘉明深ク其靈驗ニ感シ歸朝ノ後更ニ社殿ヲ建  
 設シ神領一百石ヲ寄附セラレタリ加藤氏徙封ノ後蒲生氏崇敬  
 故ノ如シ蒲生氏嗣ナク國除セラレ寛永十一年松平隱岐守定行  
 封ニ當國ニ就キ勝山城ヲ治ム崇敬舊ニ仍ル寛文七年定行孫定  
 長故アリテ深ク當社ヲ尊信セラレ飛騨ノ良匠ニ命シテ社殿ヲ  
 改築セシム其結構山城ノ石清水ニ倣ヒ寶殿廻廊塙垣ニ至ルマ  
 テ悉ク華麗ノ彫刻ヲ施シ莊嚴善ヲ盡シ美ヲ盡セリ茲ニ於テ神  
 威益々新ニ光明燦々今ニ至ルニ詣者絶ル時ナク渴仰他ニ類ナ  
 シ當時旗幟弓矢太刃鐵等莊嚴具備セサルナク粟米二百石ヲ以  
 テ神領ト定メラル維新後社領ノアルナク産子ノ保護ニル處ト  
 ナリ將ニ舊觀ヲ失ハントス惜哉而シテ寶物中  
 四帝一后之宸翰 時鳥香 輪光琵琶 孫武子之卷三册  
 信宗皇帝額二枚 吉光之短刀 國光之短刀

等最モ著名ナリ其ノ他書畫幅樂器等百般ノ器具數百アリ悉ク  
 舉クルヲ得ス

釋日本紀曰 仲哀天皇 神功皇后ト俱ニ道後ニ 御幸セシ  
 時今ノ社地ノ所ヲ以テ行宮ト定メ給ヒシ故ニ此山ヲ御假屋  
 山ト云フトアリ

口碁曰 仲哀天皇 神功皇后ト共ニ當國ニ 御幸アリテ今  
 ノ社地ノ所ニ行宮ヲ營ミ給ヒ 應神天皇ヲ身籠リ給ヒシニ  
 因縁シテ社地ニ充テタルナリト

伊豫風土記曰 仲哀天皇 神功皇后ト同シク御幸シ給ヒシ  
 時 行宮ニ湯瀧ヲ築キ温湯ヲ汲運ヒシニ因リ此所ヲ湯築ト  
 唱ヘシニ後世湯月ト改ム蓋シ國音相通スレハナリ

當社明細帳曰當社往古伊佐爾波神社中古湯築大神近代湯月  
 八幡宮明治三年伊佐爾波神社ト復舊ス云々

古歌

今朝みれば雪ふりしきぬ伊佐爾波の

さよめいそくな神のみやつこ

愛比賣方道の後の神の温泉の

にこらて澄める月の宮邊に

鴉 溪

道後十六谷ノ中ニテ最モ有名ノ勝地ナリレカ河野家没落ノ後  
世ノ變遷ト共ニ漸次荒廢ニ屬シ唯其ノ名稱ノミナリシヲ天保  
某年松山藩士大高坂舍人(號天山)亭ヲ營シ五清淨室ト名ケテ自ラ  
樂シム天山没後再ヒ荒廢セシヲ明治十七年有志輩其名跡ノ湮  
滅セシコトヲ嘆キ五清淨室ノ遺趾ニ就キ清流ニ沿ヒ點ニ二十  
有餘亭ヲ架ス五六ノ割庖店アリ水滄ク樹深ク幽邃ニシテ蒼翠  
滴シトス實ニ此境ノ一大勝景ト云フ可シ

御手洗川

伊佐爾波神社ノ馬場ヲ横流スルモノ之ヲ御手洗川ト云フ清流  
掬ス可シ正面ニ石橋ヲ架シ大板式ヲ此ノ橋上ニ修ス又年ノ旱  
魃ニ當テハ此ノ石ヲ徹シテ板橋ヲ架シ浮橋ノ祈禱ト稱シテ此  
ニ之ヲ修ス總テ社頭ノ秘訣トナス其因知ル可ラス側ニ老楓二  
三株アリ秋後愛ス可シ又流ニ沿フテ一小池アリ元文二年春松  
山侯命シテ之ヲ穿タシム蓋シ石清水ノ放生池ニ擬ス池邊花木  
數多アリ風致尤モ幽閑春夏ノ候賞スルニ堪ヘタリ

湯月古城 或湯月館

冠山ノ南ニ在ル一垓ノ丘陵是ナリ元暦二年河野伊豫守通信ノ  
經營(築城トモ云フ)ニシテ其子孫代々ノ治城タリ周圍ニ二  
重濠アリ東方ヲ大手門トシ西方ヲ櫛手門トス外周五百二十間  
堤内周廻四百六十間東門アリ西門迄ノ距離百六十間本壇高サ

四十五間三尺廣サ東西九間南北十一間三尺中壇廣サ各東西五  
 間南北三間ニシテ本壇ヨリ少シク下リテ巽及西北ノ三ヶ所ニ  
 又北中壇ノ北落ナル杉之壇ハ高サ七間廣サ東西十二間南北四  
 十五間三尺本壇ノ南西ニ一小溪ノ形ヲ爲ス所アリ之ヲ土器谷  
 ト云フ此ハ是レ河野家食膳每常土器ヲ用ヒ日々之ヲ此地ニ捨  
 ツ故ニ此名アリ今尙偶々地ヲ穿テ土器數枚ヲ獲ルコトアリ天  
 正十三年ニ至リ河野家没落スルヤ福島正則暫時茲ニ治城セシ  
 カ其ノ越智郡古國分ニ移リシヨリ復住ムモノナカリシカハ爾  
 後漸次竹林ト變シ常ニ鳥鷲ノ棲宿スル所トナリ居リレニ明治  
 十九年新ニ拓テ公園トナシ衆竹ヲ芟除シテ花樹ヲ培養ス

### 道後公園

湯月城ノ荒廢ニ屬スルヤ草竹濫リニ繁茂シ當時ノ城郭池濠ノ

地空シク鳥魚ノ淵叢トナリ居リシニ明治十九年官之ヲ公園ニ  
 附シ大ニ艸萊ヲ誅除シ新ニ花樹ヲ種植シ四時ノ美觀漸ク具備  
 ス實ニ温泉浴後散策ノ適所トナリタリ

### 岩崎神社

初ノ岩崎權現ト云フ道後公園内ノ東南ニ在リ相傳フ河野氏ノ  
 湯月城ヲ築クヤ當時伊佐爾波神社此地ニ鎮坐アリシヲ同社現  
 今石礮ノ中間南側ニ遷座シ而シテ舊趾ニ一小祠ヲ營シ遺趾ヲ  
 存セシモノ是ナリト

### 護國山義安寺

道後公園ヲ距ル東二百步許ニ在リ當寺ハ河野彌四郎景通ノ子  
 彦四郎義安(後改通安)ノ創立ナルヲ以テ寺名トナス云々又一書ニハ



河野通秋法名ヲ義安寺殿トス故ニ例レテ一寺ヲ建ツトモ云フ  
 本尊ハ釋迦ノ坐像ニシテ寺内ニハ行基作ノ樂師唐刻ノ觀世音  
 及ヒ石地藏等ヲ安置ス相傳天正十三年河野家没落ノ時老臣等  
 此寺ニ於テ荷水ヲ飲ミ相共ニ二君ニ仕ヘサラソコトヲ誓約セ  
 レト後寛政三年五月二十九日雷火ノ災ニ罹リ縁記古文書ヲ始  
 ノ河野家代々ノ位牌及寄付狀十六羅漢ノ畫幅等盡ク灰燼ニ歸  
 ス茲ニ於テ傳記ノ憑ルヘキナレ寔ニ惜ム可レ是ヨリ前松平定  
 靜侯來テ當寺ノ書類ヲ閱覽セシコトアリトソ

### 熊野山石手寺

温泉郡道後村大字石手ニ在ル巨刹ニシテ往古ハ虚空藏院安養  
 寺ト號レ堂塔廊宇宏大ニシテ六十六坊アリシト云ヒ傳フレト  
 モ今ハ其十一ヲ存スルノミ抑 元明帝和銅五年三月伊豫大領  
 河野玉與白山權現ヲ此ニ勸請シ其子玉純 聖武帝神龜五年ニ

當リテ七堂伽藍ヲ建立セリ山上ニハ愛宕大權現麓ニハ三重塔  
 (本尊釋迦脇侍文珠) 大師堂(弘法像) 觀音堂(行基作) 樂師堂(本尊立  
 普賢何モ運慶ノ作) 阿彌陀堂(本尊坐像) 等其ノ他尙多々アリ中ニ就テ三重塔念佛  
 開鐘樓仁王門(仁王) 等尤壯麗ヲ極ム又境内ニ姿見池不動石等  
 アリ什寶ニハ太古ノ石劍影向鏡十八天之畫圖司ノ式目足利家  
 ノ教書空海及一逼上人ノ筆蹟等其他牧擧ニ迫アラニ又昔時河  
 野氏ノ子弟等多ク當寺ニ於テ修學ス且ツ山門ノ邊リニ伊豫守  
 源賴義朝臣ノ碑アリ

### 車返櫻

石手寺ノ境内樂師堂ノ傍ニ在リ保元元年春モ 崇徳天皇ノ讚  
 岐國ヨリ此花 徹覽ノタメ行幸アリシニ偶此ノ花開カス空シ  
 ク門前マテ 還幸アラセラレシ時俄ニ花ノ開キタリト 奏聞  
 アリタレハ即チ御盤ヲ返ヘサセラル依テ此ノ稱アリ當時ノ

名におはよ復も来て見む花の春

夕影のこす雪の古寺

### 大山積神社

石手寺ノ東ニ在リ舊記ニ曰ク弘安二年河野對馬守通有祈願スル所アリテ越智郡宮浦村大山積神社ノ末社十六坐ノ一ヲ此ニ勸請セシモノナリト

### 城山

温泉郡湯山村字末ニ在ル古城趾ニレテ河野通能ヨリ數代此ニ城居セシカ土佐守護長曾我部元親ノ陷ル所トナリ河野家ノ七將此ニ自盡ス後村民爲ニ一小祠ヲ營キ其靈ヲ祀ルト云フ甲岩古梅等アリ共ニ河野ノ遺物ナリトス

### 柳素鷺社

温泉郡湯山村字柳ニ在リ明治三年マテ柳牛頭天王ト稱ス故ニ世俗柳天皇ト云フ除疫ノ神ナリトシテ歳首ニハ諸人多ク參拜ス

### 天一神社

温泉郡湯山村字藤ノ野ニ鎮坐マス天一神社ハ奈賀加美天御中主神ヲ合セ祀ル處ニシテ安民快樂五穀豐饒ヲ守ラセ給フ神徳殊ニ著シケレハ旱魃雨ヲ祈ル必ス靈驗アリ因テ舊藩主松山侯深ク此ヲ尊信セラレ領内ノ祈願所トナス故ニ諸人ノ賽スルモノ亦多シ殿内ニ春日作ノ面アリ之ヲ湧ヶ淵ニ鑑シテ雨ヲ祈ル神祕アリ

### 新田靈社

新田靈社ニアリ共ニ湯山村ニ在リ字河中(舊稱)日浦村(舊稱)ニ在ルモノヲ  
 上新田大明神ト稱ヘ其ノ水口(別名)稱ニ在ルモノヲ下新田大明  
 神ト稱ヘシカ現今下新田ハ上新田ヘ合祀セラル記註社前ニ碑ア  
 リ左少將新田公義宗其從兄左衛門佐脇屋公義治ノ事ヲ勸スニ  
 公ノ墓碑今尙ホ社頭ヲ東レ距ル數十歩ノ叢中ニ在リ又下新田  
 ノ社ヲ合祀セサリ前社殿ノ扉歌アリ左ノ如シト云ヘトモ今  
 ハ絶テ知ルニ山ナシ(上新田ハ義宗下新田)  
義治ヲルト云フ  
 なにしあふ恨はされよ梓弓

矢竹心のいしにたゝんと

### 新田公祠之碑

豫國道後温泉郡山中日浦村有新田祠者二在東曰上新田祠祀  
 小新田公義宗也在西曰下新田祠祀其從兄左衛門佐脇屋公  
 義治也里人相傳南軍既衰連戰不利正平廿四年秋八月二公潛匿

平山羽之羽黒山以圖恢復三十年矣及南北講和其志不果明德四  
 年春正月舉族密去羽黒山經信濃適紀伊依雜賀貞直夏四月航海  
 而來伊豫依河野氏族土居通景得能通綱居宇和郡猛嶽城最後從  
 此山村應永十二年秋八月七日義治卒齡八十三冬十一月五日義  
 宗卒齡七十四慶下二十七士亦皆終于此地後經百四十有餘年河  
 野通直欽二公志節就其墓各立小祠歲時致祭云實天文十七年也  
 探案水府日本史云正平二十三年七月義宗與義治起兵與上杉憲  
 將等戰不克死之又云建德元年義治出軍武藏上野與上杉朝房戰  
 不克走信濃不知所終但野乘名後太平記者錄二公蹤跡甚詳曰義  
 宗伴死與義治閑行潛匿於羽黒山明德四年密赴伊豫又記天正初  
 二祠鳴動事云二公終老死于彼地所司乃建小祠崇祀之號曰新田  
 明神以今觀野乘所錄與里民所傳如合符節蓋正史據足利氏所錄  
 故至僻境軼事則不得而知也野乘則民間所私記故幽隱微密之事  
 自得其實耳松村長重者日浦村產也常憾其事湮沒不傳于世欲得

余文以勅諸石嗚呼新田氏之族精忠貫日展轉苦戰百敗不屈真古  
所希觀至如二公亦惟終身圖恢復老竟死于僻邑深山之中天之福  
善者或不信乎天正之後足利氏亡滅而幕朝之創業出于新田氏之  
派流則天之報應果在於此而二祠鳴動者或二公之靈有感乎其際  
會耶余嘉長重之志乃詳記二公終始且辨野乘之得實與正史之傳  
訛係之以銘曰

建武信取、爭在兩源、赫々新田、忠勇褒門

烈矣二公、百戰僅存、恢復不遂、安慰冤魂

撥亂垂統、果在支孫、天之報應、視諸後昆

嘉永紀元 戊申 秋八月 松山 日下 探撰

### 湧ヶ淵

石手寺ノ水上湯山村字末ニ在リ危巒絶峰兀トシテ對峙シ鬱蒼  
タル老樹ハ岩際ニ蟠屈ス水其間ヲ貫流シ急湍愈激シテ深淵ニ

落チ其響百雷ノ墜ルカ如ク又以テ人語ヲ交ユルヲ得ス實ニ其  
ノ奇拔謂フ可ラス而シテ三伏ノ候ト雖モ寸毫ノ減水ヲ見ス幽  
ヲ探リ奇ヲ愛スル韻人騷客ノ常ニ曳杖スル地ニシテ幽邃絶雅  
ノ一大勝境ナリ又少シク下流ニ山太郎淵(一)半藏淵(名)ナルモノアリ  
ト云

### 菊ヶ森

菊ヶ森ハ三吉長門守ナル者ノ古城趾ニシテ湯山村字食場ニ在  
リ舊井及練馬場ノ蹤跡今尙存セリ

### 奥之城

温泉郡桑原村大字東野ニ在ル古城趾ニシテ河野某命ヲ此所ニ  
落シメ後チ村民小社ヲナ營ミ其靈ヲ齋ヒ祀リテ奥之城八幡ト  
稱ヘリ

### 石手川 一名寶川

温泉郡湯山村水々峠ニ發源シ西南ニ流レ松山城ノ南ヲ繞リテ和氣温泉伊豫ノ三郡ヲ落瀨シ重信川ト合シ伊豫郡垣生村ニ至リテ海ニ注ク長サ八里餘大ニ灌溉ニ便ナリ

### 竹之宮地藏尊

温泉郡道後村大字持田佛海山西龍寺内ニ安置スル竹之宮地藏尊ハ定朝ノ作ニシテ京師壬生寺ノ地藏菩薩ト一体分身ノ靈像ナリ昔時人皇七代 孝靈天皇ノ末裔河野氏ノ一族ニ竹之宮官主ナル者アリ或時其ノ居邸ノ坤位ニ當リ一線ノ光輝ヲ發ス斯ノ如キモノ夜々ナリケレハ官主奇異ノ想ヲナシ其ノ地ヲ堀ラセケルニ果シテ地藏菩薩ノ石像ヲ出ス依テ一字ノ堂ヲ營シテ此ニ之ヲ安置ス云々又一書ニ云フ其頃偶々官主ノ室姫メリ其ノ安産ヲ祈リ且貧乳ナリシカハ多汁ナラソコトヲ願ヒレニ兩ナカラ其靈驗新ニアリケレハ其度毎灸豆揚枝等ヲ供ヘ奉リタルト今ニシテ尙詣者ノ之ヲ捧クル者アリ

### 月之輪田 一名一步田

道後村大字持田西龍寺ノ北一小路ヲ隔ツル耕地之ヲ月之輪田ト云フ此田タル古ハ挿扶ノ時汚濁中一團清澄恰モ月輪ノ如キ象ヲ呈セント

### 宇佐八幡社

道後村字中井手ニ在リテ祭神ハ 應神天皇ナリ此地ハモト松柏繁茂ナシ一小林ヲナシタリ然レトモ一旦伊佐爾波神社ニ合祀シタル際樹木ヲ伐採レ近來再ヒ建築シタルニ付新社ノ景况ヲ爲ス惜ム可シ

### 東照院市隱軒

道後公園外濠ノ西ニ在リ本尊ハ觀世音菩薩春日ノ作ト云河野彈正少弼通直ノ室綾子(河野刑部大)ノ開基ナリ初メ天文十三年

二月七日通直入道シテ龍穩寺殿ト稱シ温泉ノ北陵ニ閑居ス綾子モ亦同シク崩髮シ月海智印禪尼ト號シ今ノ所ニ一字ヲ建テ閑居スルコト二十有九年ニシテ遷化ス實ニ天正元年十月十八日ナリ今寺中ニ五輪塔アリ則チ智印禪尼ノ墓ナリ

### 三光田

道後村字今市北側ニ在リ古ハ毎年插秧ノ時一園清澄恰モ日月星ノ如キ象ヲ呈セシカハ農民等此ノ地ヲ耕作スルヲ憚リシト又一時ハ修験者ノ居室トナリ居リシト云フ

### 勅使橋

蕪橋又湯川小橋無漏橋

和氣郡御幸村大字山越長建寺門前ノ流ニ斜ニ架レタル小碓ナリ長一丈六尺幅八尺六寸往昔橋主計頭ト稱スル者勅使トシテ十六日櫻へ參向ノ時此所ニテ車ヲ駐メシ處ナリ故ニ勅使橋ノ名アリ

### 天臨山龍穩寺

和氣郡御幸村山越ノ山腹ニ在リ抑モ當寺ハ河野家累代ノ香花院ニシテ彈正少弼通直ノ開基ナリ通直天文十三年二月七日入道シテ自ラ龍穩寺ト號シ道後温泉ノ北陵ニ梵刹ヲ構ヘテ居ル後年今ノ處ニ移轉ス舊幕時代ハ所謂錄處ニシテ伊豫國曹洞禪寺二十六寺ヲ支配ス當時ノ什寶ニハ

#### 蜀江錦之袈裟

紺紙金泥之法華經 八軸 光明皇后(聖武天皇)之御筆

紺紙金泥之金剛經 一軸 宮内權少輔藤原俊信之筆

龍穩寺殿(河野信)之像 一幅 自畫

天德寺殿(河野宣)之像 一幅 自畫

日勢院殿(河野賢)之像 一幅 自畫

釋迦文珠普賢之像 三幅 兆殿司之筆

十六羅漢年德尊神之像 二幅 河野通宣之筆

山釋迦之像

一幅 狩野古法眼元信之筆

七十四

文珠大師

一幅 河原氏女雷信之筆

龍頭觀音之像

一幅 瑞友之筆

等其他尙多クアリ又境内ニハ河野家數代ノ墓碑存ス

### 雙頭蓮

御幸村大字山越龍穩寺本堂ノ後ヘコ一小蓮池アリ何時ノ頃ニ  
カアリケソ一蓮雙頭ノ花ヲ着ク時ノ佳侶之ヲ 天皇ニ捧呈シ  
タレハ 陛下珍奇ニ開食サレ添クモ卿相ニ詩歌ヲ贈與セヨト  
勅命アリシカハ前中納言重豐卿以下十人各自短冊ヲ寄贈アリ  
タリト

### 十六日 櫻 (車返ノ坂)

和氣郡御幸村大字山越龍穩寺ノ境内北ノ溪ニ在リ往昔此山ニ  
花ヲ愛スル一老翁アリ病テ死ニ漸ス其子ニ告テ曰ク吾レ年既

ニ八秩死モ亦遺憾ナレ只今春花時ニ及フ能ハサルヲ如何セソ  
ト歎息シテ熄マス其子此樹ノ下ニ至リ懇ロニ其意ヲ陳フ猶人  
ニ訴マルカ如クス明日人アリ告ク櫻花開ケテ爛漫タリト乃チ  
翁ヲ扶ケテ是ヲ觀セシム翁見テ感歎數刻ニシテ歎ス實ニ正月  
十六日ナリ嗚呼草木心ナシト雖モ其孝子ノ至誠ニ感應スルコ  
ト響ノ如シ誠ニ奇異ト謂フヘキナリ今ニ至テ陰曆正月十六日  
霜雪ノ中必ス花ヲ着ク故ニ世人之ヲ十六日櫻ト云ヒ且ツ老人  
櫻ト呼ヒ愛翫境カス毎歲此日文人墨客多ク樹下ニ會シテ之レ  
ヲ賞ス又同日ハ踏歌節會ノ當日ナレハ節會櫻トモ稱フ而シテ  
添クモ 舒明天皇道後温湯行宮ヨリ此花ヲ觀覽ノタメ行幸ア  
リシニ偶々此花開カス空シク 還幸アラシク時俄ニ花ノ開ケタ  
リト奏聞アリタレハ即チ 御盤ヲ返ヘサセラル依テ櫻樹ヨリ  
西ニ下ル坂ヲ車返ノ坂ト云フ又天徳ノ昔橘主計頭ナル者勅語  
ヲ蒙リ 勅使ニ下ラレシコトモアリタリ

七十五

萬歲山千秋寺

七十六

御幸村大字山越ニ在リ黄檗禪宗ニシテ貞享年間千朶和尚ノ開基ナリ舊藩主松平定直公ノ建立ニシテ本尊ハ釋迦如來印觀ノ作ト云フ境内大樹多ク堂宇ノ建築樓閣ノ構造庭園ノ風致等山城國宇治黄檗山ヲ摸シ山門ニ入レハ恰モ支那國ノ觀ヲナセシカ今ハ殆ト壞頽ス什物ニハ涅槃像及達摩像(何レモ)ノ幅等掛物アリ

愛宕山御幸寺

當寺ハ河野大法師ノ古城趾ニシテ御幸村大字山越ニ在リ寶徳三年大法師此ノ所ニテ戰死セシカハ後其ノ靈ヲ祭リテ三木明神トハ名クシナリ籠ニ一小寺アリ御幸寺ト云フ抑モ此ノ地ハ往古 舒明天皇ノ道後温泉ヘ 行幸アラセラレシ時ノ 行在所ナレハ斯ク稱スルナリ

客天満宮 飛梅山園盛寺

御幸村大字祝谷ニ在リ相傳フ菅公筑築左遷ノ途次風浪ノ爲メ上陸アリテ暫時滞在アリシ垂跡ノ地ナリ故ニ之レヲ客天神トハ稱ヘレナリト後明德四年ニ至リ河野通能當寺ヲ再建シ其後加藤嘉明朝鮮田陣ノ際更ニ堂宇ヲ増築セラレヌ次テ松平少將定行公ノ封ニ此ノ園ニ就クヤ上杉謙信ノ秘藏セシ摩利支天ノ木像並ニ飛梅天神ノ畫像一幅ヲ寄附セラレシ爾來梅花山ヲ飛梅山ト改ム

祝谷山常信寺

當山ハ松山城主松平定行公本城ノ長ニ方ルヲ以テ平安ノ比叡東武ノ東叡ニ擬シテ天台宗ノ寺院ヲ設立シ鬼門ノ鎮守ト爲ス又當寺ニハ少將定行公ノ遺骸ヲ葬リ廟ヲ眞常院殿ト號ス

七十七



東照宮

七十八

御幸村大字祝谷常信寺山内ニ在リ當宮ハ松山城主松平少將定行公ノ勸請ニテ當時宮殿ノ結構ヲ計畫スト雖モ幕府ノ許可ヲ得ス依テ私ニ神廟ヲ營シ歲時祭典ヲ怠ラザリシカ同宮二百五十年ノ神忌ニ先チ大ニ土工ヲ起シ三年ニシテ神廟盡ク成ル經營最モ華麗ヲ極ム

薄墨櫻

和氣郡伊莖村下伊莖西法寺ノ境内ニ一大櫻樹ノアルアリ名クルニ薄墨ヲ以テス相傳フ天武帝白鳳九年后病アリ當寺ノ樂師如來ニ御祈願アリテ其癒ユルノ後天皇倫旨ヲ下シ給ヒシヨリスク名クルト雖モ傳記ノ詳カナルモノナシ

振鷺園

温泉場東ノ丘ニ在リ明治二十五年浴場改築ニ際シ温泉ノ碑ヲ茲ニ徙スヤ大ニ艸菜ヲ拓キテ新ニ花樹ヲ種植シ遠ク溪水ヲ引キ三五ノ亭子ヲ構ヘ以テ浴後散策ノ地トナス

道後八勝

温泉樓 月 靈之石 陽炎 振鷺園 雪  
圓満寺 蛙 奥谷 鶯 鵲溪 納涼  
冠山 郭公 放生池 蓮

道後十六谷

石切谷 義盛寺谷 圓満寺谷 木谷  
柳谷 細見谷 鵲谷 法雲寺谷  
櫻谷 鷺谷 立石谷 柿之木谷  
大堂谷 大谷 奥谷 湯月谷

七十九

12/34  
A/1054  
乙 那

明治三十四年十月七日印刷

明治三十四年十月十五日發行

發行所 道後溫泉事務所

愛媛縣溫泉郡道後湯之町甲九百四番地

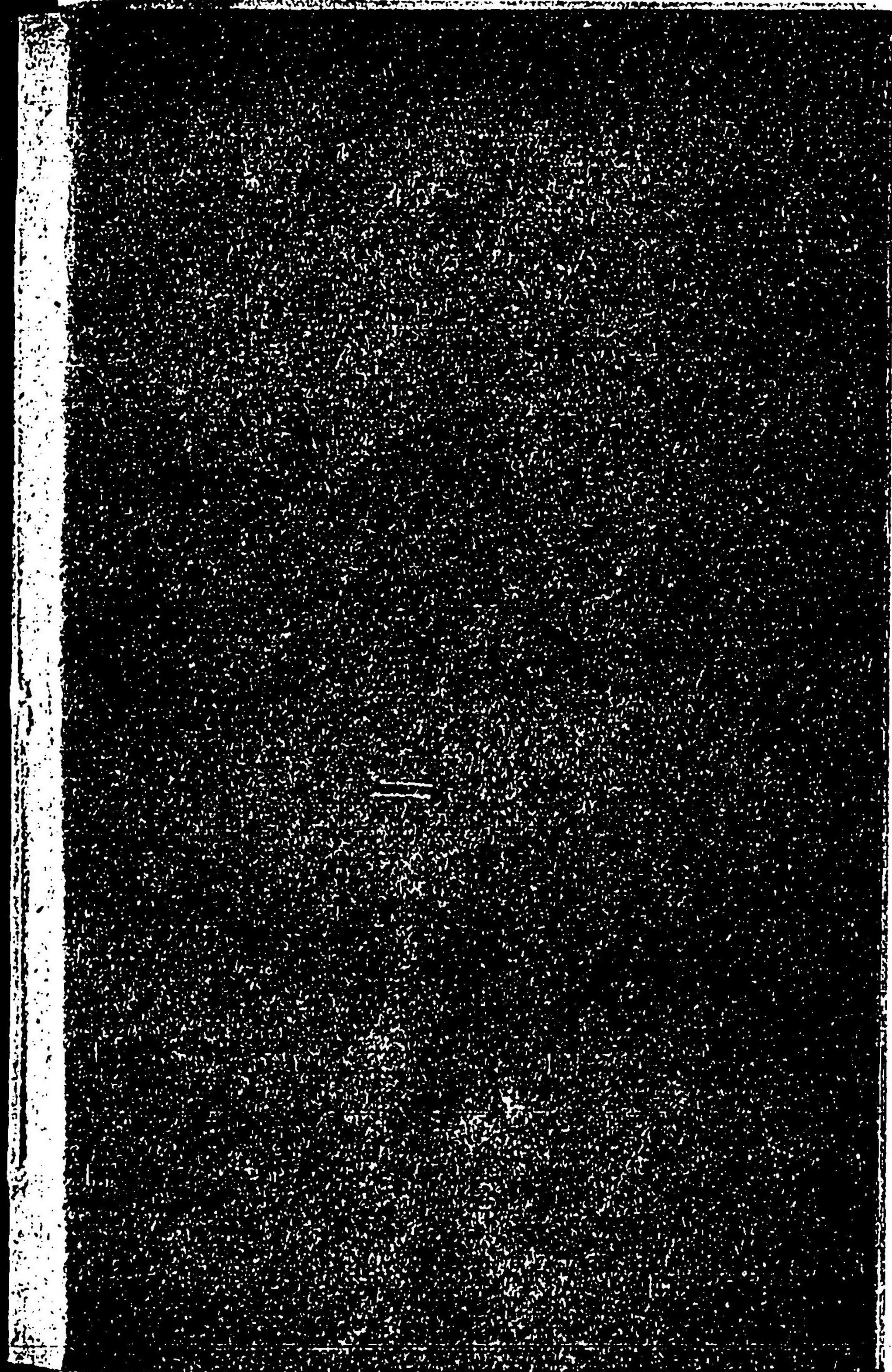
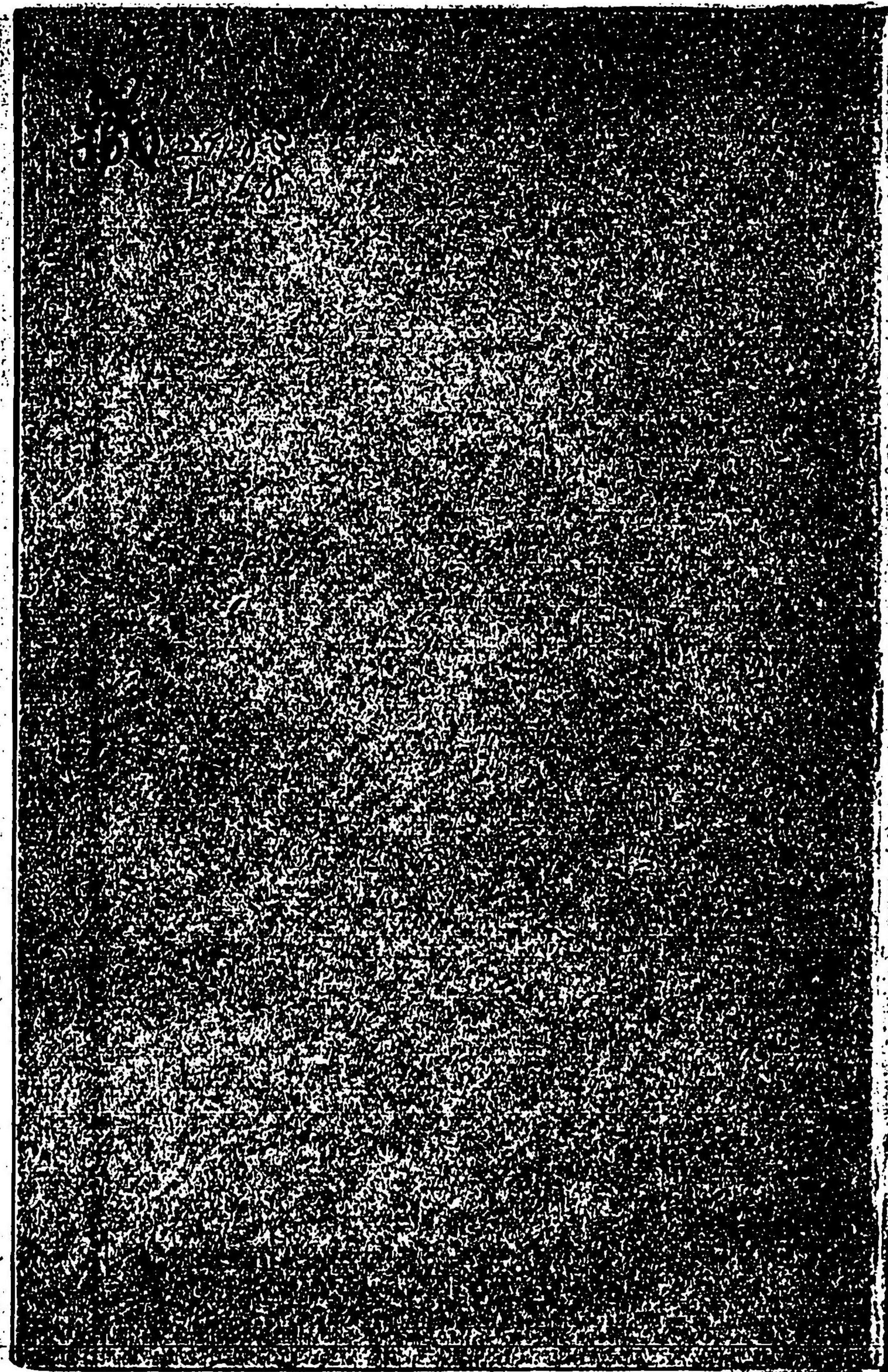
發行兼著者 伊佐庭如矢

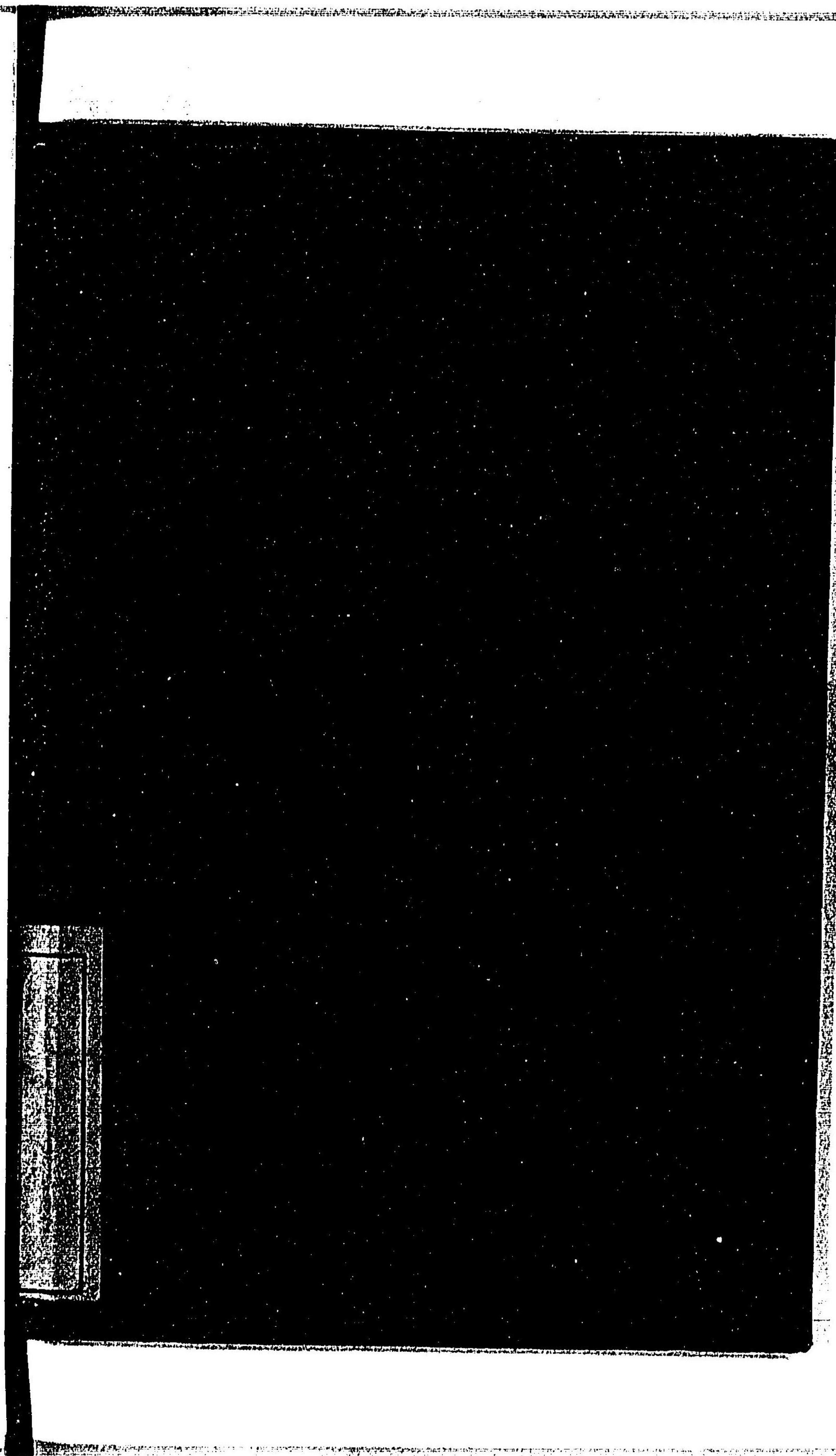
愛媛縣松山市榎町十一番戶

印刷者 岡野首彌

全上

印刷所 向陽社





291.83  
I-68

026099-000-7

291.83-I68

道後温泉誌略

伊佐庭 如矢/著

M34

ADC-3756



25 12 18